

愛知県陶磁美術館×尾張旭市立渋川小学校 PTA お父さんの会

コラボレーション 「とことん本物体験」実施報告

佐久間 真子

(愛知県陶磁美術館 学芸員)

岩淵 寛

(愛知県陶磁美術館 陶芸指導員)

はじめに

本稿は、令和元年8月24日(土)から12月7日(土)にかけて開催した、愛知県陶磁美術館と尾張旭市立渋川小学校 PTA お父さんの会のコラボレーションイベント「とことん本物体験」の実施に至る経緯とその実施結果に対する所見をまとめた報告である。

当館初の試みとなる本イベントを開催したことで、例年開催の「復元古窯焼成 織部を焼こう」を今後、小中学生や未就学児を含めた家族連れ向けに発展させて行くに当たっての様々なヒントを得ることができた。これらを記録としてまとめ、今後の企画や運営の検討材料として活かしていきたい。

1. 事業概要

1-1 実施に至る経緯

愛知県陶磁美術館では、毎年秋に敷地内の復元古窯において、窯体保存・普及啓発・調査研究を目的とした焼成を行っている。この焼成に関わる一連の事業は、とくに普及啓発の面を強化する目的で、一般参加者を募り勉強会から作品制作、窯場見学、報告会などを組み合わせたイベント「復元古窯焼成 織部を焼こう」として例年実施している。

例年、「復元古窯焼成 織部を焼こう」には100名近い一般参加者がいるが、勉強会から報告会までを含めると夏から秋にかけて最大7回程度の来館が必要となっている。また初心者歓迎の旨も広報しているものの、やや知識や経験を必要とする印象が強いイベントであること等から、未就学児を含めた家族連れや、小中学生、若年層の参加者は大変少ない状況が続いていた。

さて平成30年12月に、「尾張旭市立渋川小学校 PTA お父さんの会」役員より、平成31年度の同会のイベントにおいて、当館とのコラボレーション企画の打診があった。とくに「復元古窯焼成 織部を焼こう」に興味をもったうえで、これに子供たちが参加できないかという趣旨であった。しかし後述するとおり、通常通りの「復元古窯焼成 織部を焼こ

う」にただ参加頂くだけでは運営が困難であることも判明した。

一方、当館としては中長期的な目標として、小学生を含む幅広い世代が復元古窯焼成に親しむ機会を拡大していくことを掲げていた。そのため、今回は同会の参加者をモニターとして迎え、小学生中心の参加者が参加しやすく安全な運営ができるイベントの形をともに探ることとし、コラボレーションを受け入れた。

1-2 ミーティングの開催と協議内容

令和元年6月から数度にわたり、お父さんの会役員とミーティングを開催した。ミーティングでは、「①イベントのねらい・目標・希望」を出し合った上、双方の「②実施に向けての制約や条件」を確認し、「③ ①②を踏まえた実施内容検討」を行った。

① イベントのねらい・目標・希望

- ・例年のお父さんの会主催イベントとは異なった体験をしたい
- ・小学1年～6年生のどの学年が参加しても体力的に無理のない内容としたい
- ・子供と保護者が体を動かしながら協力し合える作業をもちこみたい
- ・焼成作業にはぜひ立ち会いたい。炎がよく見える夜間が望ましい
- ・地元の産業であるやきものや、在住地域の土などに関心を持ってもらいたい

② 実施に当たっての条件や制約等

- ・イベント回数は全4回程度であること
 - ・4回のうち1回は会場を渋川小学校とすること
 - ・広報にあたり、施釉、絵付け、焼成などの用語は難解な印象がある
 - ・完成品は、生活の中で使用できる器としたい
 - ・完成後、小学校の何らかのイベントにおいて実際に器を使用したい
- (以上お父さんの会より)
- ・人数(作品数)は、親子1組2名を20組程度(40個程度)であること
 - ・焼成作業の見学には保護者含め、参加者全員の保険加入が必須であること
 - ・夏期はとくに熱中症対策などがとりやすい体制とすること

(以上当館より)

③ ①②を踏まえた実施内容検討

- ・通常の復元古窯焼成で行う勉強会は行わない
- ・原土の採取や素地土づくりを取り入れる
- ・焼成作業は夕方～夜にかけて、基本的に見学のみ
- ・窯場の雰囲気を感じられるようレストランに要請して軽食を用意する
- ・完成後の作品を使用するイベントは追って検討する

また、限られた人数の役員、教員および職員での運営となることから、運営体制や役割分担についても協議した。参加者募集や、実施内容の連絡は全て児童への手紙の配布および本イベントの特設 WEB ページを用いて行うこととした。



(写真 1、2) 令和元年 6 月のミーティング風景

1-3 実施内容および日程、役割分担

1-2 をふまえ、制作する作品は、館敷地内で採取した原土を用い、鉄絵を施した「食べ物をいれる器」に決定した。また、イベントタイトルは「とことん本物体験」、全 4 回の内容およびタイトルは、当館敷地内で行う原土の採取と精土を行う「土づくり」、成形をおこなう「形づくり」、絵付けと施釉を行う「色ぬり」、復元古窯焼成での焼成作業の見学を行う「焼く」に決定した。イベントのタイトルは、児童が普段体験できないやきものづくりの工程や現場を感じさせられるものとし、各回のタイトルは実施内容が伝わりやすいよう平易な言葉を用いた。

日程

7 月 4 日 (木) 渋川小学校の児童に募集案内を配布、WEB ページを公開

12 日 (金) 申込締め切り

8 月 24 日 (土) 9 : 30-11 : 30 第 1 回「土づくり」 会場：陶芸館とその周辺

9 月 7 日 (土) 13 : 30-15 : 30 第 2 回「形づくり」 会場：渋川小学校理科室

10 月 14 日 (月・祝) 13 : 30-15 : 30 第 3 回「色ぬり」 会場：陶芸館

11 月 2 日 (土) 17 : 00-19 : 00 第 4 回「焼く」 会場：復元古窯

11 月 16 日 (土) -11 月中 作品引き取り

(※焼成後、作品仕上がりトラブルのため、11 月 23 日 (土)-12 月 7 日 (土) に変更)

役割分担

当館：作品制作指導、焼成見学指導、会場設営

お父さんの会：参加者募集、参加者への連絡・広報宣伝（募集チラシ作成、特設 WEB ページ作成を含む）・会場設営補助

2 実施のようす

2-1 募集～参加者決定

7月4日（木）から渋川小学校全児童に募集チラシ（図1）を配布し、イベントを告知し参加者を募った。特設 WEB ページを同日公開。チラシには特設 WEB ページへの QR コードを掲載した。

7月12日（金）に募集を締め切った。10日ほどの募集期間であったが、定員を超える21組43名の応募があり、これを全て受け入れることとした。参加決定者には、実施日前に別途案内手紙（図2）を配布した。



(図1) 募集チラシ・特設 WEB ページ（一部）



(図2) 案内手紙例(「土づくり」分)

2-2 8月24日(土) 第1回「土づくり」

当館敷地内から原土を採取し、精土を行う日である。

準備等：実施日である8月24日(土)が雨の予報となり、原土の採取の現地がぬかるみ滑りやすくなる等の危険が予想された。したがって、前日までに当館職員が原土を採取し保管しておいたものを精土する内容に変更した。採取の現地は見学のみとした。



(写真3) 原土の採取地の見学



(写真4) 原土を細かく砕く



(写真5) 砕いた土をふるいにかける



(写真6) 細くなった土の感触を感じる



(写真7) 土に水を混ぜて練る



(写真8) 練った土をまるめる



(写真9) 精土完了

経過及び所見：精土作業は、1時間半程度で終了した。参加者は、採取地から採ったばかりの石や木片などの混じる荒い原土が、精土によって粘りを帯びたやきものの粘土へと変化することに驚いた様子であった。作業工程も単純であったことや、土が目に見えて変化していくことにより、集中力を切らすことなく終えることが出来た。

2-3 9月7日(土) 第2回「形づくり」

「土づくり」で作った土を用い、作陶を行う日である。

準備等：実施当日は猛暑日となることが予想されたため、参加者の拘束時間を2時間程度とすることを目標とした。また会場設営の負担を軽減し、当館から持ち込む荷物も軽量化するため、陶芸館で通常使用している手回しロクロを用いず、A4の紙の上に粘土を置き成形を行う方法を採用した。会場となる渋川小学校理科室には、同校の協力により、大型扇風機を設置し、窓を適宜開けるなど、熱中症対策をとった。

素地土の事前準備としては、2-2で精土した土に「愛陶2B蛙目粘土(原土)」を出来上がり量の50%程度混ぜ、全体量を増やすとともに耐久性と可塑性を持たせた。

参加者の集合後は、まず出来上がりをイメージできる試作品を見せながら、成形の手順

を説明し、各々の作業を開始した。作品には鉄絵を施すため、その余白を意識させることや、文様をつける場合はクシなどを用い凹凸をつけること等を伝えた。

成形後の作品は、いったん同校内で数日乾燥させ、陶芸館へ運搬し乾燥後、素焼きを行った。



(写真 10) 会場設営



(写真 11) A4 サイズの紙の上で成形



(写真 12) クシなどで凹凸模様をつける



(写真 13) 成形が完了した作品

経過及び所見：ロクロを用いないこと以外は、通常陶芸館で行っている成形作業と大きな差はなく、円形の作品も下に敷いた紙を回しながら容易に成形することが出来た。ただし水分をふくむと紙がちぎれやすく、数度紙を交換する必要があった。

参加者はテーマに沿って事前に作品の形を決めてきた方も多く、全体的にスムーズに作業が進んだ。

2-4 10月14日(月・祝) 第3回「色ぬり」

素焼き後の作品に、鉄絵具で絵付けし透明釉を施す日である。

準備等：鉄絵具および透明釉は、今年度の復元古窯焼成で使用しているものを用意した。



(写真 14) 鉄絵の具で絵付を行う



(写真 15) 施釉する



(写真 16) 施釉後の作品

経過及び所見：鉄絵具、釉薬ともに、ほとんどの参加者が初めて触れる材料であったことから、手探りの部分がやや多い作業日となった。

やきものの絵付けに特徴的な、素焼きの素地が絵具の水分を急激に吸っていき筆運びが滑らかでないことや、立体の器に描くため手元が定まらないことなど、参加者はひとつひとつ体験しながら作業を進めた。

釉薬のなかに手を入れ、その温度や感触を感じながらの施釉はとくに新鮮な体験という声が多かった。絵付けした文様がいったん釉薬ですべて隠れるが、焼成後に文様がまた現れる点も興味深かったようである。

文様を決めてきた参加者も多かったため、時間内に作業は終了した。また、作業中に1点破損が生じたが、釉着での修復を試みることにした。

この日に、次回の第4回「焼く」での見学希望人数を確認したが、当館の想定を超える70名超(参加者の家族等を含む)の申し出があったため、安全確保と円滑な運営を優先し、当初の43名での人数制限を行った。

2-5 11月2日(土) 第4回「焼く」

復元古窯焼成の窯焚きにおいて、制作した作品を焼成する様子を見学する日である。

準備等：今年度の復元古窯焼成は、11月1日(金)に火入れしており、2日(土)当日の夕刻は焼成が全体の中頃まで進んだ段階と予想された。したがって迫力ある焼成作業の見学が行える一方、高温になる窯および周囲の安全確保にも十分な検討が必要となった。

まず、陶芸館実習室を控え室および食事スペースとした。窯場には、少人数班に分かれ順に移動して見学することとした。控え室での待機時間が長くなることから、レストランからカレーを(1名200円)を運び、待機時間に食事をとることとした。参加者には、燃えにくい綿の衣服の着用を呼びかけた。

窯場では、窯の構造の解説をまじえながら、焼成室の横の通路にて薪の投げ入れ作業や温度測定の様子を見学し、続いて窯の後ろ(煙出し)を見学して戻る流れとした。



(写真17) 窯の構造解説



(写真18) 薪の投げ入れ作業の見学



(写真19) 控え室にて

経過及び所見：焼成作業の見学は、参加者ほぼ全員が初めて薪窯焼成を目にすることから、企画当初から期待も高かった。窯場では、炎の温度や色・光などに見入る参加者も多く、また煙の量などにも驚きの声が上がっていた。参加者による撮影も盛んに行われた。

子供を中心とした40名以上の見学者が一度に窯の見学に集うことは、当館初の試みであ

ったことから、楽しみと安全を両立した今回の運営についておおむね目的を達成できたものの、今後の検討材料も多く得ることとなった。

参加者がより充実した体験を得るためには、窯場では可能な限り、作業の様子や炎・煙等をじっくり観察し、窯内に入っている自身の作品も思い浮かべる時間を確保することが望まれる。作業員との会話も行えればなお理想である。しかし、比較的手狭かつ作業が進行中の窯場での見学を、夕刻～夜間における子供たちの拘束時間とのバランスもとりながら運営することは、今後も工夫の余地があると感じた。

2-6 作品の完成と引き取り

2-5の後、11月5日(火)まで焼成作業は続けられ、冷却期間を経て11月11日(月)に窯開きとなった。

全点破損なく焼き上がり、釉着を試みた作品も接着ができた。しかし試作品として制作したものとはやや異なる仕上がりとなった。

試作品では茶～濃い茶色に発色していた鉄絵具は、今回は濃い茶色～黒に発色した。また、厚く塗った鉄絵具の上の透明釉の一部に縮れが生じた。

この縮れには鋭利な部分もあり、触れると怪我の恐れがあることから、該当部分にヤスリをかける等の修正を行うこととした。修正作業に時間を要するため、11月16日(土)～11月中に予定していた作品引き取りを、11月23日(土)～12月7日(土)に変更した。

12月7日(土)までには全点の引き取りが完了した。



(写真 20、21) 出来上がった作品：修正前の状態

所見：今回、釉の縮れが生じたことと、その修正を行ったことで、焼き上がった作品にいくらか手を加えて引き渡すことになった。薪窯での自然な仕上がりを感じてもらうために、そのまま手を加えずにおくことも検討したが、参加者が子供たちであることを考慮し怪我の未然防止を優先することとした。

なお、縮れの要因としては、①採取した土を使用していない他の復元古窯焼成の作品と

比較し、土そのものに不純物が多く混じっていたことや、②鉄絵具の濃度や施釉する際の釉薬の厚さなどの調整を、参加者各々の加減に任せていたこと、③それらが焼き上がりに難が生じるほどの大きな差が出ないと職員が予想していたこと、等が挙げられる。

引き取り後:当初、完成した器を当館レストラン内もしくは渋川小学校内のイベントにおいて使用することを検討していたが、諸般の事情により、小学校内でのパネル展示において完成作品の披露をすることとなった。

お父さんの会役員が12月中旬にかけて完成した作品を実際に家庭において使用している写真等を募り、プリントアウトして掲示が行われた。掲示には写真とともに寄せられた感想文も添えられた。

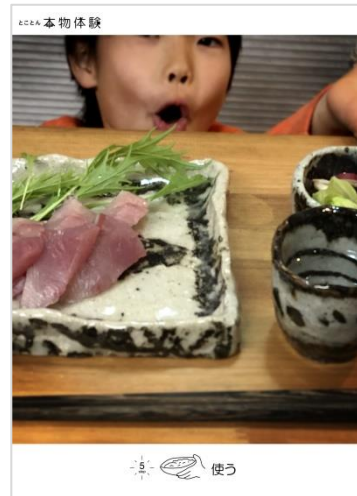


(図 3) 引き取り・写真募集のお知らせ

(写真 22) 校内掲示のようす



(写真 23, 24) 掲示に使用された写真 (保護者提供)



(写真 25、26、27) 掲示に使用された写真 (保護者提供)

3 まとめ

本イベントは、当館初の試みとして、お父さんの会との密な協力関係によって実施された。当初 1-2 で挙げていた目標は、改善の余地を残すもののおおむね達成できたのではないと思う。以下、要点ごとに達成事項 (⊕) と改善点 (⊖) を挙げる。

目標設定・企画内容検討

- ⊕ ・お父さんの会役員との数度にわたるミーティングを開催することによって、参加者とその保護者、小学校、当館職員のいずれにも過度の負担をかけない運営を行うことが出来た。
 - ・器作成にあたっての一連の作業は、小学生でも無理なく行えるものであった。
- ⊖ ・焼成の参加希望者が予想を上回っており、人数調整を行わなければならなかった。
 - ・完成作品の披露と共有について、内容の決定が遅れてしまった。

広報・連絡

- ⊕ ・お父さんの会役員によって、参加者募集のチラシとウェブサイトおよび講座毎の案内手紙が速やかに完成され、募集や連絡が大変スムーズに行われた。
 - ・参加者名簿については小学校が作成したため、個人情報の管理も問題なく行われた。
- ⊖ ・プレスリリースも作成し、新聞社にも投げかけたものの、取材は呼び込めなかった。

運営

- ⊕ ・お父さんの会役員と小学校教員が、講座毎に会場設営と撤収や参加者出欠確認等を担当したため、当館職員が作業指導に集中できた。
- ⊖ ・焼成作業の見学については、やや急ぎ足の見学となってしまった。
 - ・薪窯の焼成ではやむを得ないが、作品の仕上がりが予想と異なっていたため、参加者の怪我の予防を優先し作品にいくらか手を加えて引き渡すことになってしまった。

当館の中長期的な目標である、復元古窯焼成の一般参加者の年齢層拡大にむけて、本イベントでは大変多くの情報を得ることが出来た。モニター事業としては、目標を達成できたと言える。

ただし、お父さんの会役員と小学校の協力を大きく助けられた面も強く、当館の主催事業として展開していくには、今回の成果を踏まえた企画、広報、人員配置等を練っていく必要がある。やきものを知り、制作を親しむ絶好の機会である復元古窯焼成の充実に向けて、今後も検討を進めていきたい。